

三鷹市山本有三記念館館報

Yuzo Yamamoto Memorial Museum Report

第15号
2016年9月

開館20周年記念企画展

銀幕の有三文学

2016年 9月16日(金)～3月20日(月・祝)
2017年

開催にあたって

作家・山本有三「1887-1974」は井の頭公園のほど近く、玉川上水のほとりに佇む大正末期建築の洋館を購入し、昭和11（1936）年4月、吉祥寺から三鷹に移り住みました。有三はこの三鷹の家で代表作「路傍の石」や戯曲「米百俵」を生みましたが、進駐軍の接收によって、昭和21年11月、この地から離れることを余儀なくされます。

戦後、接收が解除された後、有三は青少年の育成に役立ててほしいと三鷹の土地と建物を昭和31年に東京都に寄贈し、翌年、東京都立教育研究所三鷹分室「有三青少年文庫」が開館しました。その後、三鷹市の移管を経て、平成8（1996）年に「三鷹市山本有三記念館」として開館し、本年11月3日をもつて開館20周年を迎えます。



【協力 煙三郎コレクション】

戯曲からの出発

多くの作家が戯曲を試みた明治末期から大正期、山本有三（本名勇造）は、第一高等学校文科在学中に栃木県の足尾銅山を訪れ、坑内を舞台とした「穴」を執筆します。初の戯曲「穴」は、明治44（1911）年の「歌舞伎」129号に掲載され、間もなく東京俳優学校の試演劇場で初演され

ました。デビュー作にして初出と初演が同時期に叶ったことは、有三の戯曲が脚本形式の文学作品の域を越えて芝居台本に通用するという、作品そのもののクオリティの高さがうかがえます。

劇作家として出発した有三は、東京帝国大学に進学し、土屋文明、久米正雄、菊池寛らと共に第三次「新思潮」を

これまで三鷹市山本有三記念館では、有三の作家として顕彰を続けてきました。この度は「銀幕の有三文学」と題し、映画化された有三作品を紹介します。

旧有三邸から子ども図書館へ、そして記念館へ。開館20周年という節目にあたり、有三が暮らした頃と変わらず佇むこの洋館で、ドラマ性溢れる有三の作品と多彩な創作活動を知る機会となれば幸いです。

実写化された有三作品

歌舞伎、浄瑠璃、講談、新派劇などを主たる題材とした日本映画は、1920年代後半より、小説や戯曲に大きく依存することとなります。一から脚本を起こすよりも、シナリオとして完成度の高い文学作品の需要は高まり、「文芸映画」と呼ばれるまでに大衆を魅了していきます。

様々な登場人物の生き様を通して、近代人が抱える究極の理念である「人はいかに生きるべきか」を主題とする有三作品は、観客の心を掴み、次々と映画化されています。新聞連載の機会に恵まれた有三は、誰がいつの時点で紙面の読者となつても理解できるものを書く必要性から、登場人物を最小限にとどめ、小さいサークルの中に様々な場面展開を用意して、ドラマティックな人間模様を描いています。有三の物語は、簡潔かつドラマ性を重視する映画の原作に適した手法によって編まれた、格好の素材だったと言えるでしょう。

有三作品は長編全6作品のうち5作品が映画化され、「路傍の石」は4度、「嬰兒殺し」は3度、「眞実一路」「生きとし生けるもの」は2度映画化されています。文学作品は、監督の指揮の下で名だたる俳優が演じて実写化されることで、また新たな支持層を得てきました。その魅力は、発表から何十年経ても色褪せることなく、我々の生活に根付いて現代まで継承されています。（文芸企画員・学芸員 吉永麻美）

興すなど、活動も本格化します。大正後期には「生命の冠」「嬰兒殺し」（大正9（1920）年）「坂崎出羽守」（大正10年）、「同志の人々」（大正12年）などの力作を発表し、次第に小説の世界へ足を踏み入れていきます。

有三は常に「人はいかに生きるべきか」をテーマに掲げて創作に勤しました。長編小説を書く機会にも恵まれ、特に、朝日新聞連載小説「生きとし生けるもの」（大正15年9月から12月）「同紙連載「波」（昭和3（1928）年7月から11月）は、主人公の内面の発掘を描いた教養小説として大きな話題を呼びました。

劇作家として出発し、小説家の地位を築いた有三。その後、映画と文学全集の隆盛期が到来する昭和中期へと活躍の場を広げてきます。

"思い出は心のふるむこと" 人生ロマンに生きよう

畠 三郎（元・映画ジャーナリスト
現・映画史研究家、切手貼り絵作家）

混雑する電車の中で本を読んでいる人の姿を、以前にはよく見受けることがあつたが、昨今は本の変わりに？を操作して小説を読む（眺める）人の姿を、時折見受けることがある。読書はやはり一冊を1ページ、一頁めくつて読むのが、本を読んだという実感ではないだろうか。

東京・下高井戸に生れ、間もなく中野の通称・鍋屋横町に転居した昭和はじめの男の子の遊びといえば、メンコ、ベーゴマ、チャンバラごっこが主な遊びであった。

5歳の幼児が近くにあった三流館「中野館」で、日活映画・大河内傳次郎主演の股旅映画「千両礫」を観たのが、活動写真（五感に心地よく響き、映画といわなかつた）との出会いであった。

遊び仲間とメンコ、ベーゴマの勝負には強いが、チャンバラごっこでは運動神経が鈍く、頭、肩など傷だらけにされていたが、人を斬るにはああだ、こうだと大河内傳次郎を真似て演出ぶりを發揮し、斬られ役から斬る役に回つたことがあつた。夕飯のとき家族全員が揃う中、私一人姿なく遊び仲間の家、近くの公園など探しても見当らず、

近所の人に「中野館」にいるよと云われ呼びに行くと、舞台袖にしがみつきスクリーンと睨めっこしていることが、三日に一度はあつたとあつて、菓子箱を持って詫び挨拶に行きその後、中野館は木戸御免になつたと後年、母に聞かされた。

昭和11年、家の都合で両親の故郷・金沢へ転

居。父が明治末、呉服・染物悉皆業なるものを石川県で開業したのが元祖であつたことから帰郷して再業。月に半分は外商に歩いて留守が多く、加えて商い繁盛、加えて弟（赤児）がいたことから通いの家政婦さんがいて、この家政婦さんの娘が映画館に勤めていたことから、毎週のよう映画館通りに夢中となり、他館は招待券を貰つて観たい活動写真を観て歩いた。私にとつて学校より「映画館が教室であつた」と云える。

「お琴と佐助」「雪之丞変化」「丹下左膳」「お夏清十郎」「桃中軒雲右エ門」「人妻椿」「朱と緑」「大阪夏の陣」「良人の貞操」「眞実一路」「愛染かづら」「浅草の灯」「鳴門秘帖」「路傍の石」「藤十郎の恋」「五人の斥候兵」「忠臣蔵」「土と兵隊」「暖流」「残菊物語」「風の又三郎」「蛇姫様」「宮本武

監督田坂具隆は「眞実一路」は、複雑な家庭関係の女を、無技巧の技巧といった誠実なタッチで

「蔵」「新妻鏡」「次郎物語」「川中島合戦」「婦系図」「將軍と參謀と兵」「歌行燈」「海軍」「二刀流開眼」「奴隸船」「姿三四郎」「花咲く港」「加藤隼戦斗隊」などなど、一年間に平均80本余（2本立興行）以上の活動写真を観た記憶が思い出として残されている。

活動写真を観て作品の良悪を思い乍ら、原作あることを知れば、時には貸本屋から本を借りてきて、書かれていた原作が映画になるとどのように描写されているかと、子供ごころにもふり返つて見ることもあり、納得いかない場合は、顔パステ入館できることから再度観に出かけていったこともあつた。

昭和12年、日活作品「眞実一路」を観たときのこと、片山明彦扮する義夫役より姉を演ずる花柳小菊を観たとき、こんな美人で優しい姉さんが私の姉でいてくれたならと我が家の姉妹三人と競べてみて、物語よりも女優ブロマイドを求めた第一号の人があつた。

描いていたのに対し、翌年「路傍の石」では、苦難を乗り越えて、人生を生きようとする少年の健気な姿を誠実に描いていく。「真実」路では存在感が薄かつた片山明彦も、この作品では実に可憐な少年役を見事に演じていた。時は明治30年代、父は上京したまま帰らず、残った母と少年の貧しき生活をキメ細く田坂具隆監督は描写。少年が張りきつて封筒貼りの内職を手伝い、左前に貼り、かえって母に迷惑をかけるシーンには、思わず私は涙した記憶がある。また悪童たちにそそのかされて、度胸だめしと走つてくる列車を前に鉄橋の橋桁にぶら下がつて耐えるシーンは、昨今の話題となる“いじめ問題”に通じるもの今考えられる。

昭和18年、学童疎開もはじまり戦乱激化の時、生涯忘れられない作品に出会った。岩下俊作の『富島松五郎伝』を映画化の「無法松の一生」。

映画は音もなく人力車の車輪が回るシーンから、映画の三分の一は、主人公富島松五郎がいかにケタはずれの男か説明に入る。

警察の剣道師範とも知らず、喧嘩を売つてたたきのめされたり、芝居小屋で、木戸から入場を断られた腹いせに、金を払つて入場し、七輪で二ヶを焼いて見物人と騒動起こしたり、することなすこと天衣無縫であつて、人呼んで「無法松」といわれている。

たまま竹馬から堀に落ちた少年を救つたことから、師団の大尉軍人の家に出入りするようになつて、多少従順になつて行く。一家との交流で彼の心になにかそれまでにない温かい生命の灯がともつてくるのであつた。

語りあいエネルギーを再燃させることは、映画がいかに庶民の中での果たしてきた役割、存在が如何程に大きなものであつたかを知らしめてくれるのである。

映画に“文芸作品”といわれる分野があつて、文学作品の映画化されたものを云う。それ故、映画と文学は切つても切れぬ文化分野と云つても過言でなく、思い出として残る筈だが、残念乍ら日本では“文化”に対する対応は世界からみるとレベルが低いと云える。

ここ二鷹市でも、昭和30年代には下連雀に「三鷹サンヨー劇場」(後に三鷹東映劇場)・下連雀二八二。「三鷹大映劇場」・下連雀二五六。「三鷹文化映画劇場」(下連雀二三〇)の映画館が存在し、昭和34年4月10日、今の陛下ご成婚当日には、「たつまき奉行、深夜の挑戦、いたづら」(サンヨー劇場)。「蛇姫様、灰神樂木曾の火祭、仮面の女」(三鷹文化)。「二等兵物語、顔のない女、青銅悪鬼」(三鷹大映)が封切られていた。各館三本立てで大人が90円以下で入場できた。それは日本が高度成長期に向つていた頃の話である。

ここ二鷹市でも、昭和30年代には下連雀に「三鷹サンヨー劇場」(後に三鷹東映劇場)・下連雀二八二。「三鷹大映劇場」・下連雀二五六。「三鷹文化映画劇場」(下連雀二三〇)の映画館が存在し、昭和34年4月10日、今の陛下ご成婚当日には、「たつまき奉行、深夜の挑戦、いたづら」(サンヨー劇場)。「蛇姫様、灰神樂木曾の火祭、仮面の女」(三鷹文化)。「二等兵物語、顔のない女、青銅悪鬼」(三鷹大映)が封切られていた。各館三本立てで大人が90円以下で入場できた。それは日本が高度成長期に向つていた頃の話である。

出会いは人生を変え、感動は人間を変えるといわれている。人それぞれの思い出から読んだ本のこと、観た映画のことを他人と語り合うことも、人間生きていく活力源となるのではなかろうかと考える。見知らぬ人同士でも、若かりし頃に観た懐かしい映画の思い出話から、当時の情熱を

昨今は人生80年時代となつて、生きて行くにエネルギーも必要となるが、考え方によつては長生きも“芸術”ともみることができる。各々“思い出は心のふるさと”を大切にして、日々の生活に活力をもち口マンに生きて人生を全うすることを願つていふ。

ガイドボランティアリポート 15

記念館で活動中のガイドボランティアより交代でリポートをお届けします

私の願い

ガイドとなって5年。この間にさまざまな企画展が実施されました。毎回テーマに沿って有三の直筆原稿や出版された本、雑誌、写真、建築関係の書類等々多様な資料が整理され、きれいに安全に展示されています。

これらの展示物に説明を加えて生き生きとした息吹を与えるながら企画展全体を広く見渡し、来館者個々に応じてシンプルに的確に、又は詳しく丁寧に対話することで、たくさんの人人に有三の作品や人となり、建物の歴史やストーリーを感じとってほしいといつも願っています。

(石田紀子)

来館者のガイド

記念館に来られる人は、初めての方が多い。又、若い人には山本有三の作品はおろか、名前も知らない方が少なからずいる。

ガイドをする時は、どんな説明をしようか、説明が紋切型にならないか等に、心掛ける様にしている。説明文を丹念に読まれている方や若い二人連れの方には、「必要な場合はお声掛け下さい」とだけ話している。

対話がスムーズにいっている時は、有三と余り関係ない話をしても、意外に時間が経っていてびっくりする事がある。これからも、充実感が持てるガイドを心掛けたい。

(小林善一郎)

▶▶▶事業報告

5月 春の朗読コンサート

毎年好評の春の朗読コンサート。2014年から公演回数を2回に増やして開催していますが、未だに参加は抽選で選ばれる、人気のイベントです。

今回は、野田香苗さんの朗読にヴァイオリンの音色がマッチして、有三が家族と暮らしたこの洋館に響き渡りました。「道しるべ」などの有三の知られざる名作の朗読のほか、ヴァイオリニスト・中村千鶴さんが、演奏はもちろんの事、最もポピュラーと言える楽器であるヴァイオリンの歴史や演奏法についての解説を交えてください、参加者は熱心に耳を傾けていました。

最終曲目は、野田さんの澄みわたる朗読と、中村さんが奏でるヴァイオリンの切ないハーモニーが織りなす「銀河のはじめ」をお届けしました。「有三の尊い心に触れることができた」「戦後70年のこの年に平和であることの素晴らしさを実感した」などの感想が、参加者から沢山寄せられました。

開館20周年を迎える山本有三記念館の想いをのせた、素晴らしい一夜となりました。



第4回 山本有三記念館 スケッチコンテスト



あなたの絵で、記念館を飾ってみませんか？

コンテスト来場者による投票と審査員の審査により選ばれる入賞作品は、コンテスト終了後に山本有三記念館にて展示いたします。有三記念公園は入場無料です。

お気軽にスケッチにお越しください！

募集期間

2016年11月1日(火)～12月11日(日)

コンテスト

2017年1月21日(土)～1月29日(日)

会場

三鷹市公会堂さんさん館

入賞作品展示

2017年2月7日(火)～3月5日(日)

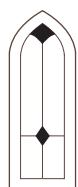
会場

三鷹市山本有三記念館

※作品規定やその他詳細につきましては、記念館までお問い合わせください、HPをご覧ください。

編集・発行

三鷹市山本有三記念館



〒181-0013 東京都三鷹市下連雀 2-12-27
TEL 0422-42-6233 FAX 0422-41-9827
ホームページ <http://mitaka.jpn.org/yuzo/>

開館時間：午前9時30分～午後5時

休館日：月曜日及び年末年始(12月29日～1月4日)

*月曜日が祝日の場合は開館し、翌日と翌々日を休館。

入館料：300円(20名以上の団体 200円)

*中学生以下、障害者手帳持参の方とその介助者、校外学習の高校生以下と引率教諭は無料。

アクセス：JR中央線「三鷹駅」南口より徒歩12分

JR中央線・京王井の頭線「吉祥寺駅」南口(公園口)より徒歩20分